

窮理
捷徑
十二月帖

内田晋齋著
上

特34-446



1200800182005

特34

446

大日本教育會館

二	五	二
册	七	二
	號	函
	三	
	架	



始



特34
140 特37
360



内田晋斋著

窮理
捷徑
十二月帖
全二册

明治十丁丑冬
一月再刻
玉養堂叢覽

窮理
捷徑
十二月帖上

内田晋斋著并書

新春之
イッコノハテモ

月
オナシサニ

下
古
集
上

10

ハクシクハクシク
アラマシ
ゴヘシジ
ハクシクハクシク

復ノ字

睦目十名

潮やうや暖あつらおがハクシク

明夜さくやハクシクハクシク

オモヒガケナキ

結むすハクシクハクシクハクシク

ハツガエナリ

正ただ身みハクシクハクシク

ハクシクハクシクハクシク

ハクシクハクシクハクシク

少私心怪我其成

车何原来何

起之理人否少

得成否及字

训多友公少

二月廿三日

首服何之理人

三子发中一朝

唐帝を以て
平定陽の城
を起す
平定陽の城を起す

お合し
平定陽の城
を起す
平定陽の城を起す

平定陽の城を起す

勢を起すより先を

後以て守るは後を

先を以て守るは先を

中を以て守るは中を

通流金く生つてお

るも一凡を堪へん

きんを以て守るは

動を起すは

ウコク

一

十

響を教はるる

と音よりしてはしるる

光と音はるる元目

時お教はるる者明

光と音はるる元目

光と音はるる元目

光と音はるる元目

光と音はるる元目

ガ右に理を以てし

考す可く猶如電光先

中後すそ後亦雷

考す可く猶如電光先

加合各流國に學ぶ者

ラシキリと人銅の

未多風の跡をよみ

未多風

之れは風を中へ
 枝は始りて有る理
 今を昔の如き事
 夫より去るも此に

層の柱は
 板を工夫して
 先づ古層に
 柱を及ぼして

ライトニシロツト

テレグラフ

追々おろし
リムビ
オノドホリ

去々
アラク
阿波

仲々
チヤ
之々
シヤ

為々
ウ
香除の粒
コ
子
シ

天々
テン
地々
チ
美々
ミ
草々
ソウ
書々
ショ

香々
カウ
友々
ユウ
友々
ユウ
友々
ユウ

以々
イ
以々
イ
以々
イ
以々
イ

末々
マツ
末々
マツ
末々
マツ
末々
マツ

カ
カ
カ
カ
カ
カ
カ
カ

今冬の時節は

暖かき日あり

梅も咲き来り

花は

梅も咲き来り

花は

梅も咲き来り

花は

其類、物ト移人、詩家

ウタヨミ シラツクヒト

の年、をほらるる所

の年、実を種とあはれ

と夜、先を生くは祝

その、あ

三目、節

梅花、も春、夜、伴

下、山、実、を、未、先、の、能

ウツクシク

悉^{まこと}明^{あきら}を^を家^け日本^{にっぽん}一^{いつ}國^{くに}

限^{かぎ}り^り止^とま^まし^して^て西^{にし}

海^{うみ}法^{はふ}金^{かね}を^を積^たむ^むる^る事^{こと}

少^{せう}の^の事^{こと}を^を積^たむ^むる^る事^{こと}

目^めを^を悦^{よろこ}び^びし^しま^ます^す

後^{のち}に^に凡^{たゞ}そ^の家^け邦^{くに}の^の事^{こと}

多^{おほく}く^くを^を知^しり^りし^して^て後^{のち}

日^ひ本^{にっぽん}一^{いつ}國^{くに}を^を保^{たも}つ^つ事^{こと}

授^ト予^カ一^{ヒト}瓶^{ビン}不^レ後^ト

於^ニ此^ノ味^ミ年^ト友^ト友^ト

相^ト与^ト言^フ

海^ノ里^ノ音^ノ

呵^ト六^ノ種^ノ種^ノ友^ト友^ト友^ト

以^テ是^ノ多^ク清^ク福^ト友^ト友^ト

其^レ也^ト其^レ心^ト友^ト友^ト友^ト

釋^ト也^ト延^ト生^ト以^テ形^ト友^ト友^ト

夕多^ト里^リ之^ノ初^{ハジメ}丸^{マル}沙^{シャ}多^タ集^{ジュ}

宿^{シュク}以^ヨ幸^{キヨク}一^{イツ}少^シ狭^{キナ}口^ク老^{ロウ}

子^シ孫^ソ方^{ハツ}方^{ハツ}軍^{イクサ}動^{ウツク}之^ノ

ハラゴナシ

免^メ之^ノ也^ヤ一^{イツ}之^ノ也^ヤ

之^ノ也^ヤ一^{イツ}之^ノ也^ヤ

之^ノ也^ヤ一^{イツ}之^ノ也^ヤ

天^{テン}竺^{トク}之^ノ何^{ナニ}一^{イツ}度^{タク}也^ヤ

之^ノ也^ヤ一^{イツ}之^ノ也^ヤ

多和まゝにん出條

町取後見問しん

一向之書案内太三當

或心まきし依りて序

亦候間一了と候

乃手取本古事

再行

甲月七日

拜字

貴人輪お酒お祈是

暑^イの寒^セの^ニ近^クは^シく^シて^マる

中^ナに^シく^シて^マる^ニは^シく^シて^マる

所^スに^シく^シて^マる^ニは^シく^シて^マる

隆^{リウ}沖^{チュウ}の^ノ人^ニ合^カへ^ル所^トす

海^{カイ}の^ノ年^ニは^シく^シて^マる

身^ミの^ノ年^ニは^シく^シて^マる

川^{カハ}の^ノ年^ニは^シく^シて^マる

孝^{コウ}の^ノ年^ニは^シく^シて^マる

了まはる友山俣の石
 釋迹世生乃地を天
 公王の南、銀湯、茶
 一踏し今、美吉、赤

之飲分、何り大、怒、男
 の港あり我、必、横、渡
 舟の中、と、幸、造、く、及、子
 不、り、何、り、バ、法、地、肉、桂

の多所 フナノリ

風 フナノリ 浪 フナノリ 波 フナノリ

航 フナノリ 海 フナノリ 舟 フナノリ

手 フナノリ 船 フナノリ 子 フナノリ 舟 フナノリ

聴ノ字

乃 フナノリ 道 フナノリ 年 フナノリ 依 フナノリ 徳 フナノリ 志 フナノリ 也 フナノリ

根 フナノリ 人 フナノリ 之 フナノリ 笑 フナノリ 案 フナノリ 音 フナノリ

と フナノリ 考 フナノリ 方 フナノリ 今 フナノリ 多 フナノリ 考 フナノリ

婆 フナノリ 羅 フナノリ 門 フナノリ 耶 フナノリ 蘇 フナノリ 教 フナノリ

志者之徵を生こゝろず

文海之垢ルン一休堪夫

キタナキ

心の中者何物も

心外も何物も及滞至

垢こゝろ積たまる心こゝろ有ある

ミジカキテガミ

五月十日

市方物之印肉界しやう

東山信あづま下しも少すく少すく

鬻ウツ一白ハク姑ニヤ所トコロ難ガタシ

少ウチ礼レ下カ其ソノ追ツ出デ梅ウメ自ヨリ

のノきキしシ人ヒト三ミ法ホウおオうウ以イ以イ

生ナマ汚キナ穢ケガレ穢ケガレ累ツラ累ツラ

いイ所トコロ一ヒト法ホウ物モノ成ナリ生ナマ之ノ

本ホをヲ出デ出デ出デ出デ出デ

衣ウエ衣ウエ衣ウエ衣ウエ衣ウエ

肉ニク眼ガン一ヒト人ヒト一ヒト人ヒト一ヒト人ヒト

人ノ目ノリ月鏡ナドヲ用ヒサレク云

三月廿九日

空を水澄の如く
 凡を跡水鏡
 木を寸寸と
 種一少多にして
 物元正

白雲の如く
 草木の如く
 空を水澄の如く
 凡を跡水鏡
 木を寸寸と
 種一少多にして
 物元正

十二月廿五日

生来の理を以て是也

草木と同く温暖

温燥の極合を以て

生衣の如く象也

及

蒲月十日

甚暑之候を以て

益古は健少起也

十二月 帖巻止

新巻の巻末に所載の
ニヨロコビ

次巻の巻末に一回の
カハリナク

その巻末に将の
シンパイ

その巻末に教の
ド

巻の巻末に氷菓菓子
アイスクリーム

一箱の巻末に贈り物
おくりもの

その巻末に夫より
シ

再巻の巻末に
ワタクシ

巾中人分ら與くひや

一曰新味ひき

新味はあ人良ひき

味甘美く天純の

物とをけく不縁く

是尖熱勿ら消去

しき満ち方偏り

差を枯れき

アキカゼ

三十四

養子せん自來法せんの薬せん

ツクリヤサ

三折さんの区くを待まち別べつ

左ひだりの待まち手て書かりしるる先まへ

デンジユガキ

ブリブリツキツキムムしし大おほ小こ二に箇箇の

桶おけを造つくりしるる少すく桶おけの

方かたに冷ひやみみ取とりし波なみの砂すな糖とう

乳ち又また牛ぎゅう乳にゅう居い糖とう汁じゅう

ウシノチ

ミカンノウツユ

松まつ汁じゅう杯はい名な好この子このの池いけ

ダイクノツユ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

ひししをよのの煙を

中ん混ん和んと夫ハより

マゼアハセル

少桶を大桶の内に

結くわう晶せう酸さん奄あん母も尾ぶ至あト

中葉と少桶ト大桶の

間葉多と入れ

之を中葉の中

冷水を注ぎ

一ノ

中筋菜のみよ子細くよ

及き水に浸夜冬

減り室を暖計水冬

下十七度位にお成

右少桶内の水冬

各にお成下は夫より

左を茶子取の内は

かみみらるる冬冬

昔未所り此好以費之

其來之技候仕方之業

價少之方層之白身カキ

此世に此方及此等タカイ

此多之此之此等之向身

此度之此用之此立身ツク

此下之此此等此等ツク

此先法集集通了も此等

少の者之法多を

中セツ家ケン管クワン便ベン多

中イ家チ管バン便テ多ガル

六百十九

終